

ステークホルダによる 合意形成方法の提案

南山大学

情報理工学部ソフトウェア工学科

2009SE077 石田雄大

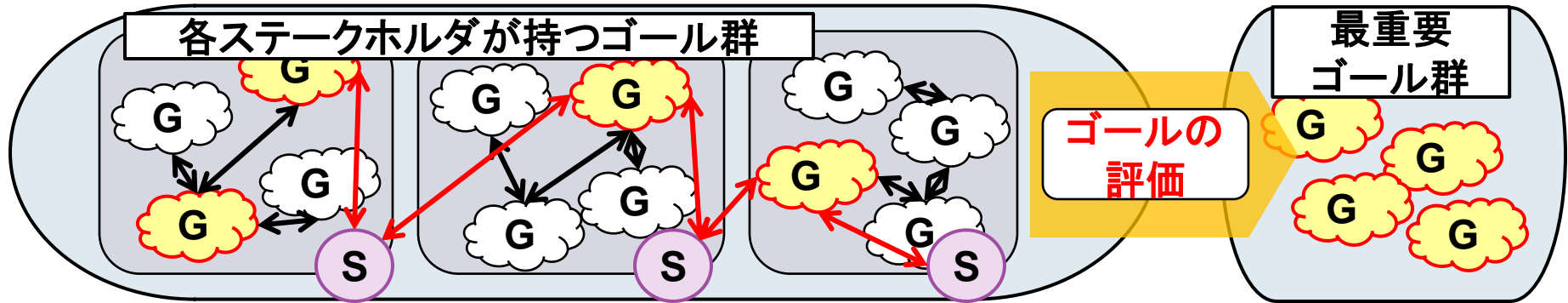
2009SE202 濁川 誠

指導教員 青山幹雄

発表のシナリオ

- 中間発表時の課題
- 先生からの質問
- クロスインパクト分析
- i*モデルとUML
- 関連研究
- 提案プロセスの詳細
- 今後の課題
- 参考文献

中間発表時の課題



提案方法の具体化

- 実例を適用し、詳細なプロセスを定義

影響度の評価

- 影響度の評価
 - 貢献/リスクの評価方法の具体化
- 影響を与える側と受ける側の評価
 - 貢献/リスクの値が階層毎に違うのか検証
 - 影響を与える側と受ける側で異なる評価をすべきか検討

プロセスの評価

- 妥当性の確認
 - 提案プロセスにより導出された最重要ゴールが妥当であるか評価
 - 導出されたゴールにゴールの関係が反映されているか検証
 - 提案プロセスの有用性を確認する

先生方からの質問

野呂先生からの質問

クロスインパクトを用いた理由は何ですか？
また、もともとの使われ方はどんな時ですか？

i*モデルを使った理由は何ですか？
ユースケースでもいいのでは？

横山先生からの質問

プロセスの代替案はありますか？
あれば、なぜこのプロセスを選んだんですか？

この研究に近い研究はありましたか？

クロスインパクト分析

Q. クロスインパクトを用いた理由は何？ もともとの使われ方は？

使用方法

将来に影響を与える、識別された様々な要因、出来事、問題間の相互依存性に焦点を当てて分析を行う



適用実績

Olaf Helmer によってDelphiメソッドとクロス・インパクト分析を1960年代初頭に開発

シナリオ分析への定性的なアプローチとして適用

分析テーマ	要素や特徴を評価する基準となる要素や環境		影響	
	+	-	+	-
対象とする要素や特徴	評価値		影響値	
影響	+	影響値		
	-			

相互依存の関係を視覚的に理解しやすく整理可能な為

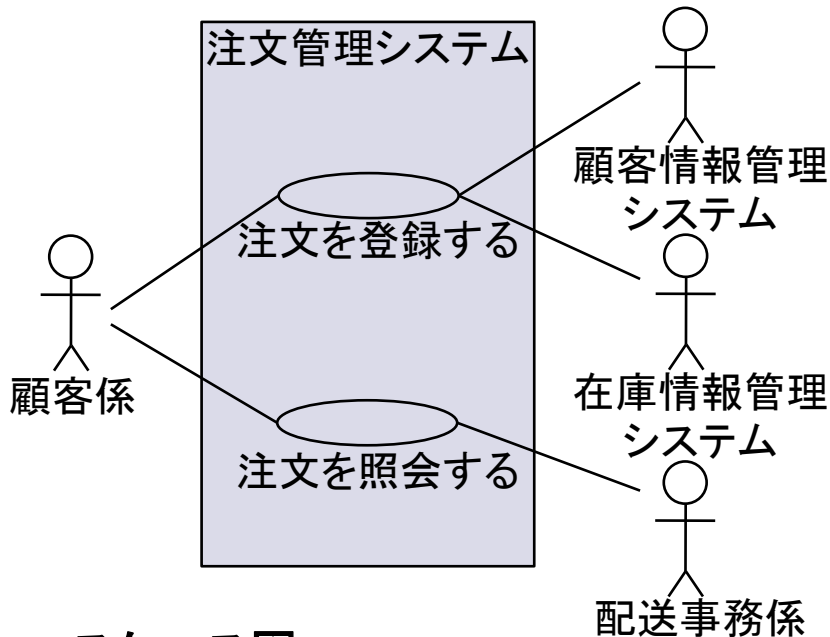


i*モデルとUML

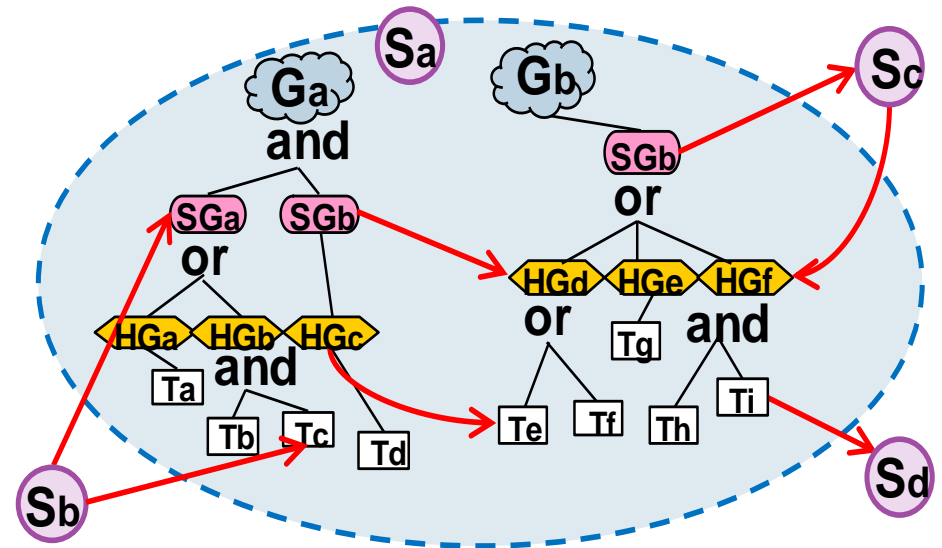
Q. i*モデルを使った理由は何ですか？ ユースケースでもいいのでは？

ユースケース

システムの機能に着目し、その振る舞いをアクターとユースケースで表現する



ユースケース図



SR図



トップゴールの依存関係だけではなく、各階層ごとに依存関係を評価したいので、SR図を利用

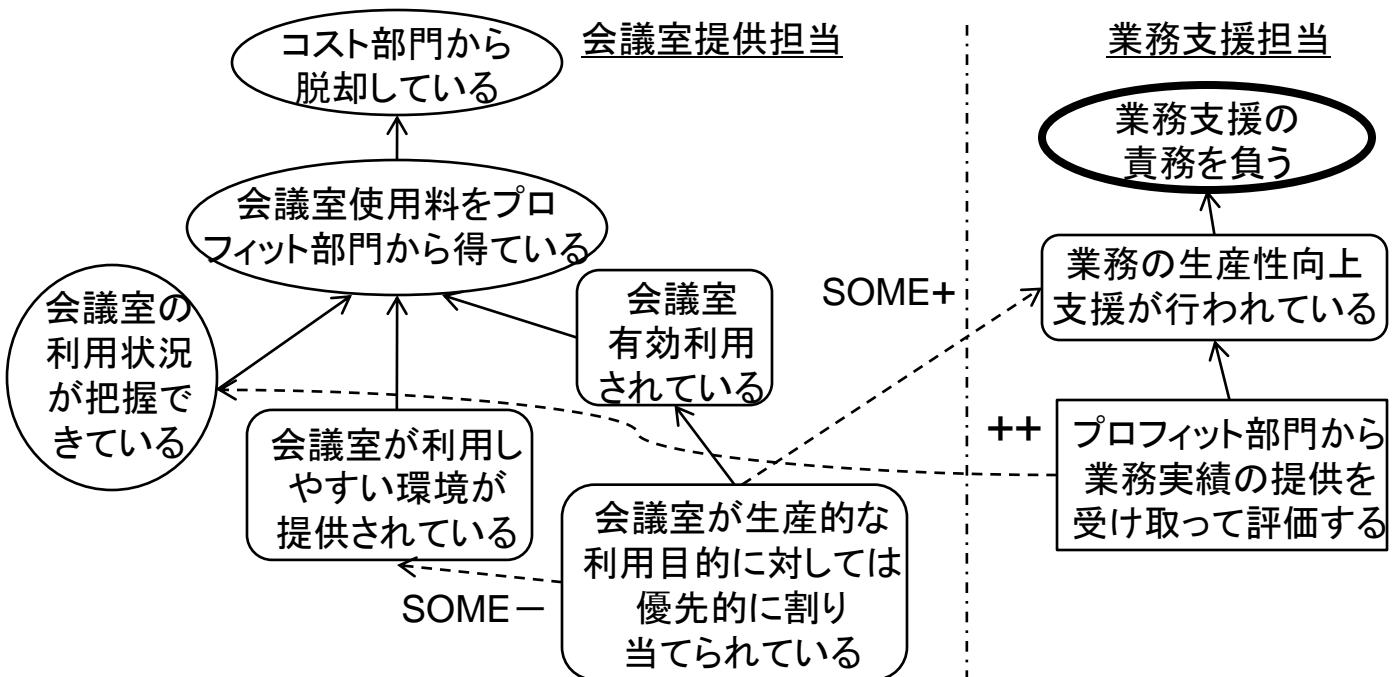
関連研究

Q. この研究に近い研究はありましたか？

ビジネスドメイン分析におけるゴール抽出技法の提案

- ソフトシステムズ方法論, i*のSD(戦略依存)モデリング, Eriksson&Penkerのゴール分析手法, 概要分析手法, ビジネスルールの定義手法など, 複数の手法を統合した手法

目的
 ◆システム要求仕様の根拠を定義すること



凡例

- 維持ゴール (Maintain Goal) - Thick black oval
- 達成ゴール (Achieve Goal) - Thin black oval
- ソフトゴール (Soft Goal) - White rounded rectangle
- 手段 (Means) - White rectangle

貢献度

- +, ++: 促進(数は度合い)
- , --: 阻害(数は度合い)
- SOME+: 促進傾向
- SOME-: 阻害傾向

提案プロセスの詳細

合意形成プロセス

ゴール指向分析によるゴール木の作成

【1】対象のステークホルダのゴール木を生成

ステークホルダの活動に着目しながら、
ゴールを分解し、ゴール木を生成



同じゴールでもステークホルダの
活動に着目し、差異を表現

i*によるSRモデルの作成

【2】SRモデルでゴール群の依存関係を表現

ステークとゴール間ではなく、
ゴール間で影響を表現する



影響 = ゴールの達成のしやすさ

【3】依存関係に貢献/リスクを付加

クロスインパクト分析

【4】貢献/リスクによりマトリクスを生成

合計値では、構成比率と貢献/リスク
評価値よりゴール全体の値を決定

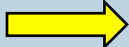
貢献/リスク分布図

【5】影響度を貢献/リスクにより分布図で表現


影響を「受ける側」と「与える側」で分けて
評価し、開発ゴールに合わせて
最重要ゴールを選択する

今後の課題

提案方法の具体化

- 実例を適用し、詳細なプロセスを定義  次回発表

プロセスの評価

- 妥当性の確認
 - 提案プロセスにより導出された最重要ゴールが妥当であるか評価
 - 導出されたゴールにゴールの関係が反映されているか検証
 -  合宿係を例に適用することで検証する
 - 提案プロセスの有用性を確認する

参考文献

- 要求工学
著:大西 淳・郷 健太郎
- 要求工学知識体系 (REBOK)
- かんたんUML
～オブジェクト指向モデリング言語がわかる本～
著:株式会社 オージス総研
- CiNii論文
電子情報通信学会技術研究報告 SS.ソフトウェアサイエンス
「ビジネスドメイン分析におけるゴール抽出技法の提案」
(<http://ci.nii.ac.jp/naid/110003277345/>)